



石ノ形古墳

1994

静岡県袋井市教育委員会



第1図 位置図

例 言

1. 本書は、静岡県袋井市国本字石ノ形332-1に所在する石ノ形古墳の発掘調査概報である。
2. 本書は調査概報であり、遺物に関しては現在保存処理中のものが多い。そのため、次年度に最終的な整理を行い正式報告とする。遺構・遺物等の解釈に錯誤をきたす場合は、次年度の報告内容をもって正式なものとする。
3. 本書の執筆、編集については白澤 崇が担当した。

I. 調査に至る経緯

平成4年の8月に、関西大学の学生数名と石ノ形古墳の見学に行った折り、その内の1名が墳頂付近で鉄の破片が地表面に露出しているのを発見した。当時同行していた、市職員の白澤が学生に命じて、その鉄の破片を取り上げさせた。この破片を見た瞬間、短甲の一部であると直感したが、ひとまず持ち帰り詳細に観察することとした。錆を除去していくと、鉄の端部に折り返しが有り、その曲線からは、短甲の押付板の部分と判断された。こうしたことから、再び現地に戻り、周囲を見ると短甲を覆うように粘土が観察され、取り上げた破片の下部にも続

きの部分が埋まっていることが明らかとなった。以上を総合すると、石ノ形古墳の主体部が、長年の風雨によって露出しており、しかも、副葬品には短甲が納められているという予期せぬ情報を入手することとなった。

上記の判断をもとに、市の内部で検討した結果、まず遺物の保護が第一であることから東京国立文化財研究所に指導を仰ぎ、青木繁夫先生に現地で指示を受けながら短甲の露出面上に粘土と土を被せ、その上を発泡ウレタンで被覆してしまうこととした。

応急処置が完了したが、半ば主体部が地上に露出している状態で長期の保存を行なうことは難しく、発掘調査を行って遺物の保護を進めることとした。調査前から、主体部の位置・遺物の状況が一部に

せよ解った例は少なく、発掘の前までにいかなる対応をするかで、数多くの検討を行った。その結果、短甲一領が埋まっていることは確実で、良好な環境下での遺物の取り上げと修復が望まれ、青木先生に全面的にご協力頂くこととなった。

また、短甲以外の遺物の埋納状況及び墳形の把握を事前に行いたいとの目的から、奈良国立文化財研究所の西村康先生を代表とする文部省科学研究費補助金重点領域研究『遺跡探査法の開発研究』の一環として探査を行った。

その外、調査前から保存修復に至る全期間の作業内容を映像で残すことが必要であるとの方針に立ち、大型ビデオカメラ1台と小型8ミリビデオカメラ1台を併用して撮影することとした。なお、保存・修復作業の映像については、青木先生のお手を煩わしている。

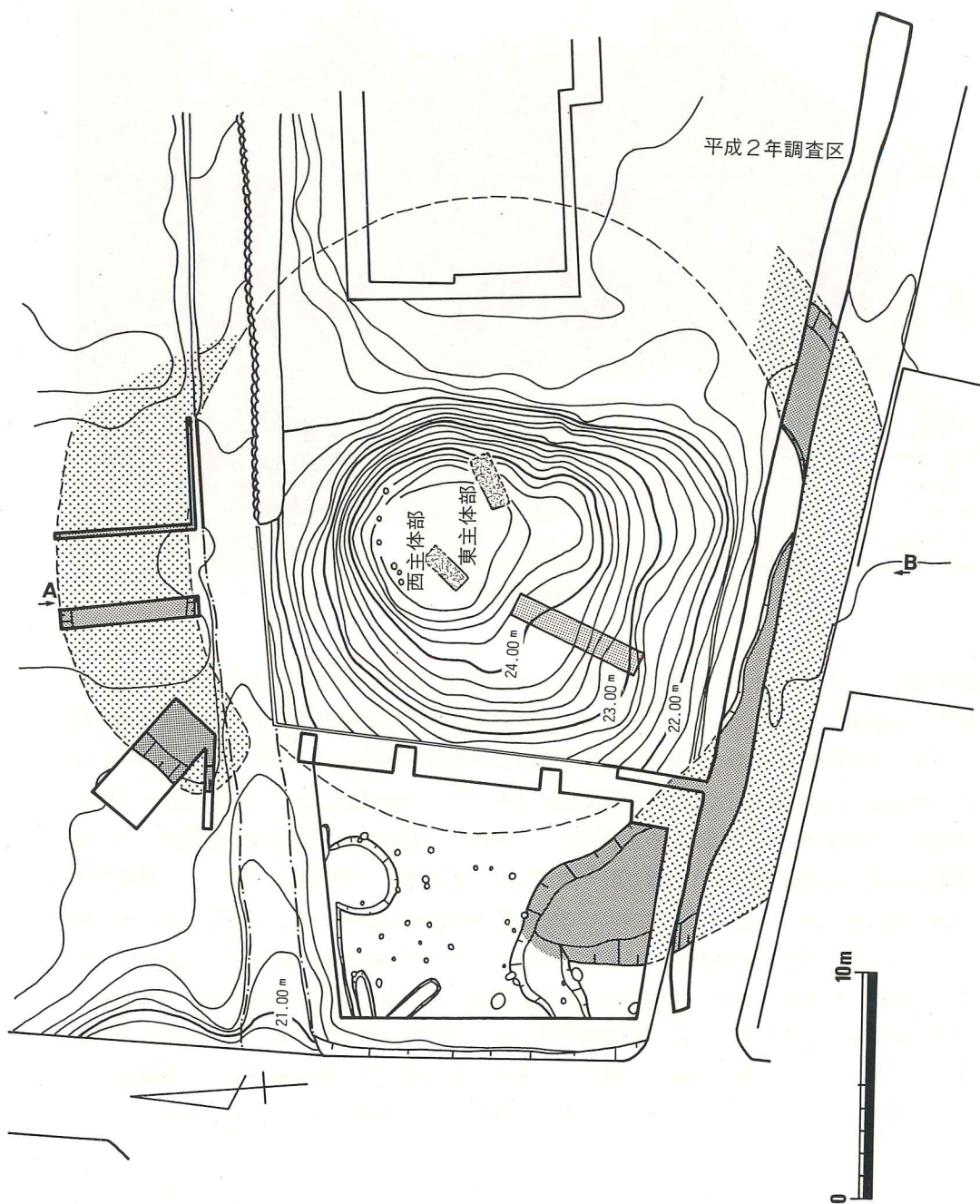
以上の体制のもと発掘調査を平成5年5月10日より実施する計画を立てた。ここに至までには遺物発見当初より、土地所有者の海野孝子・萩田友平・田代すゑさんには全面的にご協力頂き、円滑に進めることができた。



写真1 探査風景



写真2 短甲取り上げ作業



第2図 墳丘図



写真4 攪乱坑内出土鏡

される。これについては、北側の木口が攪乱抗で切断されているため不明である。特に注目されることは、棺の周辺に、棺底と同レベルで鉄刀、鉾、鉋、鉸具等を安置しており、棺を安置したのと同時に周辺にも副葬品を納めていたものと推定される。これらの棺外遺物を被覆しながら棺の周りを埋めて行き、棺上に達した段階で再び鉄斧2点を埋納している。こうした鉄製品に混じって、須恵器の甕破片が納められている。

この行為が何らかの意図のもとに行われていることは、棺底の更に下から、須恵器の甕の破片が数点出土したことから明らかである。

以上の遺物の出土状況からは、一般的に見られる。墓墳を掘り棺を安置する埋葬形態では無いと判断される。

b. 東主体部

西主体部の東側約2 m 30cmの位置に、主軸を西主体部に対して約20度東に傾けて検出した。表土を僅かに除去すると即座に玉類や鏡が露呈し、床面のみが部分的に残った状態であることが観察された。特に、東から北にかけて土の流失が大きく、棺の規模を推定することは困難である。

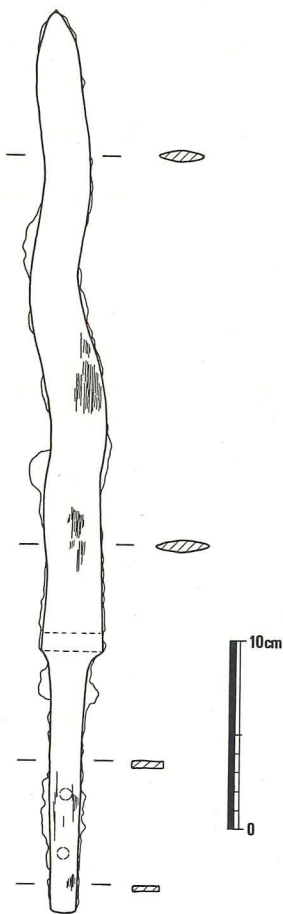
鏡の周辺には、赤色顔料が見られ、鏡本体には僅かに木片が観察された。玉類には、管玉、ガラス玉、銀製空玉があり、いずれも着装状態を良好に留めている。また、銅製の鈴釧が1点検出されたが、この周辺にはガラス小玉がまとまって存在することから、本来鈴釧に伴っていたか、腕部の装飾の一部であった可能性が高い。

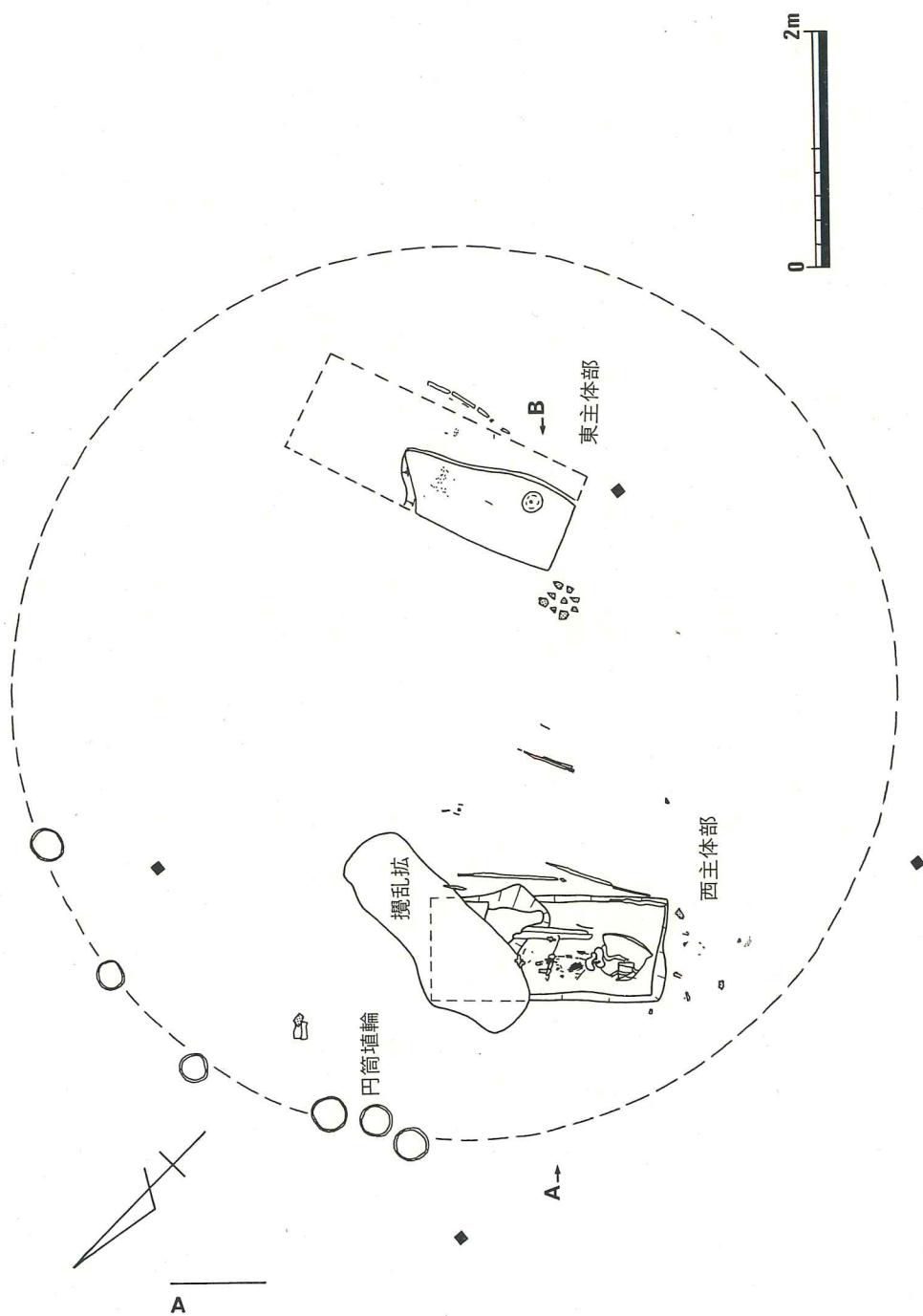
床面だけの残存状況から、棺の安置方法を推定し難いが、西主体部と東主体部を横断する土層を観察した限りでは、西主体部と同様に棺を安置した後、棺の周辺を土で覆いながら埋めていく埋葬方法が考えられ、墓墳が存在した可能性は少ない。

IV. 円筒埴輪列

墳頂部の北側に、不規則な間隔であるが、位置関係から推定すれば、東西の主体部を円形に囲む配置が想定される。墳丘内へのトレンチによれば、裾部や中段に埴輪列は確認出来ない。

第3図 西主体部出土蛇行剣
(保存処理前)





第4図 主体部遺物出土状図



写真5 東主体部出土鏡(1)

V. 遺物

西主体部では、横矧板鉾留短甲・蛇行剣・f字形轡鏡板・鉄鉾・鉄斧・鉄鏃・鉄刀・鉄剣等が出土している。また、本来副葬されていたものと推定される乳文鏡が攪乱坑から出土した。

東主体部からは、画像鏡・鈴釧・管玉・ガラス玉・銀製空玉・刀子・鉄刀が検出された。墳頂部には、須恵器の甕の破片が多く確認されており、西主体部の棺底・棺外にも少量認められた。



写真6 東主体部出土鏡(2)

VI. まとめ

以上、成果の概要を述べたが未整理の部分も多い。出土遺物からは、ほぼ5世紀後半頃の時期を考えているが、今後正式報告で更に検討を加える必要がある。

(調査協力/敬称略) 西田守夫 三輪嘉六 青木繁夫 犬竹和 向坂鋼二 植松章八 平野吾郎 西尾太加二 網干善教 柳本照男 田中晋作 藤田和尊 米田文孝 徳田誠志 中嶋郁夫 西村康 斎藤正徳 亀井宏行 田中和義 北野知孝 飛田耕児 Dean Goodman 工藤博司 川江秀孝 小川雅弘 遠藤喜和 和田晴吾 車崎正彦 松田隆二 松田史朗 古谷毅 大谷宏治 永井正浩 関西大学考古学研究室

石ノ形古墳 発行 静岡県袋井市教育委員会 印刷 株式会社 開明堂
1994年3月25日 〒437 袋井市新屋一丁目1番地の1 〒430 浜松市中沢町1-1